投

特254
681

秘本艶洋物

カゲガル泣き絵との面白

＝ナンでも諸国なんでも＝

ドイツ皇帝カイゼル陛下より
松本君平に贈られる最近の眞影

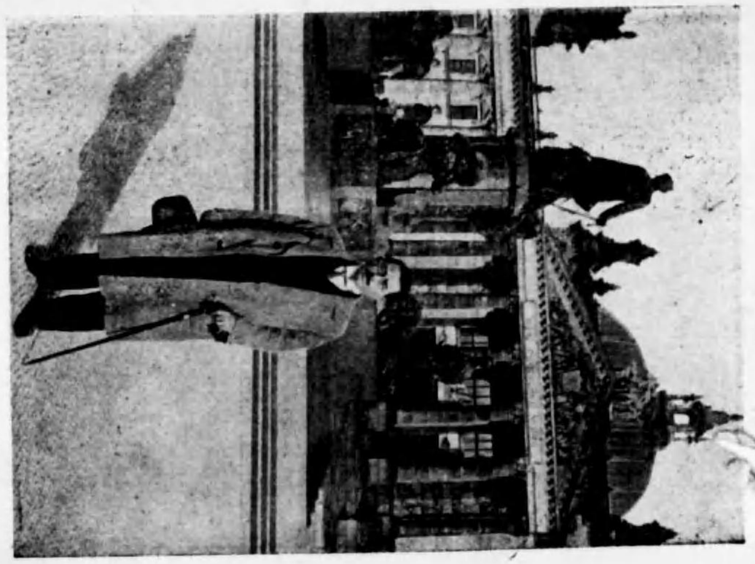
（丸本）城ンルド
城居の帝皇ツイド

（丸の二）城ンルド

特254
681

カイザル皇帝との會見

海軍參與官
衆議院議員　松本君平述



てしと最背を像クルマスヒ庭前會議ツイド
氏平君本松

風洲附繞御陛下の歸りと
松本君平氏

生きんとする歐洲を見て目次

三つの目的……一
シベリヤ鐵道にて……二
興味多き旅路……三
わが民衆の廣き新郷土……四
セネバの軍縮會議……四
山紫水明の湖都……五
第一回及第二回軍縮會議……六
日本の仲裁……七
會議決裂(英米海上覇權の爭ひ)……八
軍備縮小と武力充實……九
軍縮會議の後……一〇
スイスの大統領モッタを訪ふ……一〇
首相ムソリニーを訪ふ……一一
英雄型の近代人……一一
ナポレオンの再生……一二
異例の會見……一三
黑襯黨の獨裁政治……一五
ムソリニーの外交……一六
萬國議會々議……一六
佛國の政情……一七
英國のなやみ……一八
戰後の英國の外交……二〇
英國の政黨……二〇
自由黨の衰頽……二一
保守黨の勢力……二二
カイザル皇帝を訪ふ……二四
皇帝の返事……二五
ドルンへ向ふ……二六
懷しい古城……二六
カイザルを見て……二七
若し日本が獨逸側へ……二八
なぜ君等は獨逸と戰つた……二九
和蘭をすぎて……三一
獨逸に入りて……三三
勞農の都に來りて……三七
レニン宗……三九
共產黨の專政政治……四〇
共產黨策の變化……四〇
共產黨政治の外交……四二
露國の平和政策……四三
歐洲を大觀して……四四
共產革命の餘火……四五
新しきバランスオブパワー……四六

カイザル皇帝との會見

＝生きんとする歐洲を見て＝

松本君平

三つの目的

殆んど半歲の間、間斷なく見たり、聞いたり、感じたりした事を、極めて簡單にまとめて記述することは頗る難事業で、私の思ふ萬分の一も盡し得ないであろうと考へる。隨つて茲に記述することが、甚だ不充分で難澁のものであろうことを恐れる。其の點は御賢察を願ふのである。

今回私の歐洲に參つたのは、昭和二年六月に瑞西のゼネバで開かれた、日、英、米、三國の軍縮の會議に參るのが第一の目的であつた。會議が終つてからは、一通り歐洲列强を巡遊して、大戰後に於ける政治外交の大勢を視察し、また著名な現代の政治家、外交家、思想家などを歷訪して、意見を述べたり、意見を聞いたり、其の國々の指導精神に觸れて見たいと考へたのが第二の目的であり、歐洲列强の政治、殊に大戰後に於ては、帝王とか、貴族とかいふものゝ勢力は、全く政治の圈外に落ちて、民衆の天下となつたが、その民衆を動かすものは、政黨である。たゞ政黨によつて國家の政治機關が操縱されるのである。されば現代政治の動力である政黨が歐洲に於て如何に最も好く組織され、如何に最も好く運用されてをるかを、比較調査して見たいといふのが第三の目的であつた。

是等の種々の問題を、一々簡單に記述することは元より困難な仕事でありますから、大掴みの處だけを述べて、讀者の御賢聞に達したいのである。

シベリア鐵道にて

先づそれを述ぶる前に、一つ申上げて置きたいと思ふことは、シベリア鐵道の旅行の事である。

今回歐洲に參るにつき、ゼネバに於ける三國の軍縮會議の形勢が、成るべく早く歐洲に入ることを必要としたので、私は朝鮮より、南北滿洲を過ぎ、シベリア鐵道により、露都モスコーに入り、ワルソウ、伯林を經て、佛京巴里に出で、それから瑞西のゼネバに行つたのでありますが、私は今度の經驗から、歐洲に行かる方々は、一人も多く是非この通路を取つて旅行されんことを御勸めするのである。シベリア鐵道は、非常に沒趣味で、退屈に堪へないとかロシアを通過するのは危險であるとか云ふ說が、盛んに流布されてゐますが、それは今日に於て全く根據のない話しである。のみならずシベリア鐵道の旅行は、吾が國の歐洲旅行者に取りて、多くの利益を與へるものと考へる。

海路上海、香港を經て、印度洋、地中海によりて歐洲に行くには、少くとも四十餘日を要する。また太平洋を踰えて、米國を經て歐洲に行くには、少くとも三十日かゝる。然るにシベリア鐵道を取るとすれば、東京驛よりハルビンまで三日半、ハルビンより伯林まで八日、巴里まで九日にて達すべく、吾が帝都を發して僅かに十三四日にて歐洲文化の藪淵に入ることができる。これは驚くべき時間の經濟ではないか。これが第一の利益である。

更らに旅費を比較して見ると、印度洋、または米國經由に比して、シベリア線は、僅かに半額にも足らずして經費が足りる。旅費の經濟が第二の利益である。

興味多き旅路

シベリア線は、茫涼たる砂漠の樣な無人の野を行くからに、沒趣味、無聊に堪へないと考へる人が多いようであるが、實際は然らず。私は七月の上旬にシベリアを通過し、また歸途、十一月の初めに再び此道を通つて見た。夏の旅は、頗る涼しい、避暑旅行といつても差支へがない。沿道の風光は、實に讃美に堪へない程美しい。青々として綠の毛氈を敷きつめた樣な、一望際りなき平野もある。千古斧鉞を入れざる蓊々たる杉、松、白樺の大森林もある。スンガリーの川の如き、オビの川の如き、エニセーの川の如き洋々として幾千里を流す浩流大河もある。嵯峨たる高峰峻嶺に繞圍された、延長百五十餘哩もある、浩洋たる大湖、汽車は終日、その湖邊の一角を疾走して眺めも盡きぬバイカルの湖水もある。殊に興安嶺、烏拉山脈を越ゆる頃は、沿道一望、果てどもなく、百花爛漫、芍藥の如き、百合の如き、菊の如き、桔梗の如き、鈴蘭の如き、名も知らぬ幾百千の野花は、千紫萬紅、一時に咲きそめて、美を爭ひ妍を競ふさまは、眞とに一大自然の花園に入る心地がした。これは實況であつて、少しも誇張した言葉ではない。

その間には無數の牛、羊、駱、馬の群が牧せられてをる。興亡吾れ關せずといふやうな暢氣なロシヤの農夫や、山中曆日を知らなそうな蒙古の民族が、悠々として逍遙してをる。山川草木、人情風俗、限りなく征人の感興を惹く。これを米國の大陸や、加奈陀大陸の横斷旅行に比べて、遙かに興味の深きを覺えた。ましてや幾日も〳〵水天髣髴、變化なき大海原の、波路の旅に較べては言ふまでもない。

冬のシベリア旅行は、また格別である。廣き汽車の中は春の如く暖かに、少しも寒いといふ感じを起さな

い。窓外雪を眺めて、千里の野を走る氣分は、詩人や、俳人のあこがれる雪見といふ感傷よりも、一層雄大なものであつた。

吾が民衆の廣き新郷土

日本人に取りて、シベリア旅行は、特に大なる感想を與へずには置かない。吾が國民が、幾度か國命を賭して戰つた、そうして近世に至つて日清、日露の二大戰役を起した、その朝鮮の國土を過ぎて、更に又滿洲南北の世界大の大原野を縱斷して、大陸的雄圖に目醒め、初めて吾が國土の背後に接して、吾等民族の廣大な新郷土の開展するのを見て、吾等は最早や、島國人としてのみ止むべきではない、亞細亞大陸に數歩を踏み入れた事を現實に、深刻に考へさせられることが、どれだけ吾が國人を覺醒し、測り知るべからざる大なる教訓を與へるか知れない。百聞一見に如かずといふが、現實について得た感じは、千百の說法よりも遙かに力强いものがあると信ずる。私は、吾が國人が一人も多く此の方面に視線を放つことの喫緊であることを唱道して止まない。

ゼネバの軍縮會議

私は先づ第一に、少しくゼネバの軍縮會議について述べなければならない。

今度の軍縮會議は、先年米國華府に於て開かれた、日、英、米、佛、伊の五國軍縮會議の延長とも云ふべきものである。華府の軍縮會議の目的は、今回の軍縮會議も同樣であるが、將來の戰爭の慘禍を避けるために、世界に平和の福音を齎らすために、海軍の競爭によりて、各國民を重い負擔の苦しみより免れしむるために、世界大海軍國が、互に相談をして比率を定め、それ以上は軍艦を造ることを止めようといふ會議であつた。

その時にきめられた三國の軍艦勢力の比率は、英米が五、日本が三といふ割合であつた。但し此の比率の割合は、海軍の主力艦である戰鬪艦だけのきめであつた。

然るに海軍には、主力艦の外に補助艦として四つの種類がある。それは巡洋艦である、驅逐艦である航空母艦である、潛水艦である。それで戰鬪艦だけ競爭しない樣にきめても、他の補助艦のことをきめなければ軍縮の目的は達せられない。そこで巡洋艦以下の補助艦をも競爭しないように相談すべく、三國で會議を開いたのがゼネバの軍縮會議である。

山紫水明の湖都

ゼネバはレーマンといふ大きな湖水の邊りにある瑞西共和國の華美な都である。此の湖は、高い山岳を以て繞圍されて、玉の樣な清水を湛へてをる。世界で一番高いアルプスの高峰モンブランの山は、千秋の雪を戴いて湖の正面に屹立してをる。眞に山紫水明の境で、夏猶ほ寒い。暑を避けんがために、歐米各國の月卿雲客は、此の地に集つてくる。

ゼネバは國際聯盟の常設地で、今では世界の大評定をなす地ときめられてをる。此の湖水に臨んで、最も形勝の地を占めてをる處にボー・リバーシの旅館がある。そこに日本全權の一行、英國全權の一行が泊つてをる。それより一二町離れた處のホテルに米國全權一行の宿處が定められてをる。

世界各國から、紳士淑女が、その明媚の風光に憧憬れて、雲の如く集つてくる、此の華美な環境の中で、世界海軍の三大强國が、世界平和のために、軍縮會議を開くといふのであるから、とても其の評判は大した

ものであつた。全世界の耳目は、こゝに集注され、一齊に此の會議の雲行を凝視めてをつた。その世界三大強國の一つとして、日本がわざ〳〵極東から、此の歐洲文明の晴れの舞臺に上つて來たことは、どれだけ深い印象を、歐洲人に與へたか知れない。

第一回の會議（六月二十日）

第一回の三國會議は、六月二十日に開かれた。三國は各々軍縮に關する案を出したのである。此の會議の觸れ元である米國の出した原案の骨子はこうである。

艦	巡洋艦	一〇、〇〇〇トン迄	
	大砲口徑	八吋	
噸數制限	巡洋艦（米國）	二五萬トン—三〇萬トン	最大
噸數制限	巡洋艦（英國）	二五萬トン—三〇萬トン	
噸數制限	巡洋艦（日本）	一五萬トン—一八萬トン	最大
艦	驅逐艦	三、〇〇〇トン迄	
	大砲口徑	五吋	
噸數制限	驅逐艦（米國）	二〇萬トン—二五萬トン	最小
噸數制限	驅逐艦（英國）	二〇萬トン—二五萬トン	同上
噸數制限	驅逐艦（日本）	一二萬トン—一五萬トン	同上
艦	潛水艦	一、六〇〇トン迄	
	大砲口徑	五吋	
噸數制限	潛水艦（米國）	六—九萬トン	同上
噸數制限	潛水艦（英國）	六—九萬トン	同上
噸數制限	潛水艦（日本）	三・六—五・四トン	同上
齡	巡洋艦	二〇年	
齡	驅逐艦	一五年—一七年	
齡	潛水艦	一二年—一三年	

第二回の會議（七月十五日）

此の米國の軍縮の提案に對して、日、英の提案は大分に距離があつた。そこで六月二十日から、七月十四日まで、海軍專門委員會が開かれて、數回に亘りて協議を遂げたのである。七月十五日に至つて、三國代表間の意見を交換するために、第二回の會議を開いた。けれども三國の意見は中々纏らない。一致を見ることは困難であつた。

そこで第二回の會議の後、日英兩國海軍代表にて猶ほ屢々會談を遂げ、論議を重ねたる結果として、日、英兩國の間に重要な問題に付て、一種の協定ができ上つた。そうして會議の前途も、稍や樂觀的であつた。

此の間英國政府は、廟議を定むるために全權代表を召還して閣議を開いたのである。

然るに茲にどうしても英、米間に於て調和の望みなき、難關が二つあつた。それは——

第一、巡洋艦の噸數問題である。

米國は、一萬噸說を主張し、英國は、七千噸を力說して相下らない。即ち米は大艦主義を主張し、英は小艦主義を固執したのである。

第二、備砲口徑の問題である。

米國は、巨砲主義を取りて八吋砲を是認し、英國はあくまで六吋砲說を主張して止まない。

日本の仲裁案

此の二つの問題に於て、英、米兩國は頑として主張を枉げない。妥協の見込みがない。會議はデッド・ロックに乘り上げて、將に決裂せんとした。此の時日本は、最後の試みとして、一つの妥協案を提出して英、米の意見の衝突を調和せんとしたのである。日本の妥協案といふのは左の如きものである。

一、一九三一年まで既定以外の補助艦を造らないこと。

二、一萬噸級巡洋艦は英、米各十二、日本八の割のこと。
三、一九三一年まで米國は英國以上の造艦を爲さざること。
四、一九三一年前に爲さんとする建艦は、三國互に通知し又は協定をなすこと。
五、補助艦に關する疑問は、一九三一年までに協議決定すること。

會議決裂—英米海上覇權の爭ひ

第三回の全權會議は、九月の三日に開かれた。日本が提出した妥協案は、採用されなかつた。かくて三國軍縮會議は、決裂の止むを得ざるに到つたのである。

然らば何故に巡洋艦の噸數問題、並にその備砲口徑の問題が、左樣に重大であつたか。英、米兩國が此の會議を犧牲にしても、爭はなければならなかつたかと云へば、それは此の問題の蔭に潜んでをる重大な意義があるからである。即ち英米の海上權の爭覇を意味するからである。此の會議は、日本が最も關心した、補助艦の比率問題には、深く觸れずして遂に決裂を見たのであつた。

かくしてゼネバの軍縮會議は、其幕を閉ぢた。會議の結果はかような始末であるが、これより吾々は古き然しながら常に新らしき教訓を得た。それは國民としても、國家としても、その權威を維持するだけの强大な軍備は常に持つて居なければならぬといふ事である。

今日、日本が世界の强國として、國際間に重きをなし、その言葉は世界より敬重される所以は、何であるかと云へば、それは日本の持つてをる武力に外ならない。若しも日本からその武力を引き去つた時に、何が殘るか。恐らく日本の地位は、バルガンの小さい國よりも以下に降つて終ふであろう。吾々が軍備に拂ふ犧

牲は、可なり大きい、然しこの犧牲が今日日本國民が世界に於て、贏ち得た代價であると思へば、それは餘り高價のものではない。

軍備縮小と武力充實

猶ほ一つ此に附け加へて注意を願つて置く事は、世界大戰爭の驚くべき慘害を體驗し、その生々しき創痍のまだ癒えない今日、軍國主義に對する喧しき反對、平和論の高調されるのは、無理の事ではないと思ふ。國際聯盟の軍備縮小、或は軍備撤廢論の如き、萬國議員會議に於ける軍縮論の如き、ゼネバ軍縮三國會議の如き、其他無數の平和主義の運動が盛んに行はれてをる。然しまた同時にその裏面を覗いて見ると、今日ほど列强が、國民の武力の充實に腐心してをるのを見ることは稀れである。あらゆる方法でその國民の愛國心を鼓舞し、祖國の名譽を謳ひ國民的武勇を誇唱してをる。協會に、學校に、青年團に、クラブに、活動に、芝居に、パンフレットにポスターに、樣々の手段を用ひ、巨萬の資を投じて愛國心の高調、國民的武力の充實に苦心してをる。

これは歐洲列强を一貫せる傾向で、英國でも、佛國でも、伊國でも、獨逸でも、共產露國でも、どこへ行つて見ても驚かざるゝ一大現象である。これは一種變形の軍備擴張であり、新ミリタリズムの發現と見なければならない。

伊國のフワシ黨の如き、露國の共產黨の如きは、政黨それ自身が既に立派な軍隊である。表面には軍備縮小が高唱される、その裏面には、武力の充實が盛んに宣傳される。一面には軍國主義を盛に攻擊する、半面には新しいミリタリズムが勃興してをる。これは戰後歐洲の一大現象として、吾々は靜かに此表裏の形勢に

注意と警戒を忘つてはならぬと思ふ。

軍縮會議の後

ゼネバ軍縮會議を閉づると同時に、日、英、米の三國全權一行は、それ〴〵歸國の途についた。

私はゼネバ會議の終るを待つて、歐洲の主なる國々を一巡し、その國々の中心人物をも歷訪して、大戰後に於ける新しき形勢を視察し、殊に昭和三年より日本も彌よ普選が實行せらるゝのであるから、各國普選の情態や、政黨の組織運用等も詳細調査したいと考へたので、齋藤全權一行と別れて、暫くゼネバに殘留し、それより計畫に向つて進んで行つた。

スイスの大統領モッタを訪ふ

先づ第一に瑞西の大統領モッタをベルンの都に訪うた。

瑞西は、吾國と同樣に山岳の國で、歐洲中最も山水明媚の國である。國は小さいがカントン組織の共和國で、政治は好く整つてをる。他國より侵略される憂もなく、人民は平和を樂しんで產業にいそしんでをる。

到る處土地は好く耕されてをる。耕作せられない土地は、靑草が密生して、美觀を呈してをる。道路は田舍の道路でも好くペーブされ、掃除されて、塵埃を見ない。國土山川を美化して、多數の外客を招致するのは、スイスの國策だと云はれてをる。

此の國は小さい國であるが、國が小さいために列國に先んじて、いつも色々の政治上の新らしい試みが行はれてをる。例へばレフェレンダム（人民一般投票制度）の如き政治上の制度が、疾くにスイスに於いては行はれてをる。吾國でもそろ〳〵此の問題が議會の議に上つてきた、やがて政治上の大問題となる時が來るであろう。人民の政治上の智識が進んできて、レフェレンダムを行ふ樣になつてくると、議會や、政黨の勢力も一變してくる。そういふ時代が吾國にも到來するかも知れない。

大統領のモッタには、官房長のマメリーといふ、快活な、愛嬌のある男が案內者で、大統領の書齋で會つた。誠に圓熟した好々爺で、胸襟を開いて好く語り、好く論ずる人である。會談のトピックは、レフェレンダムのことや、スイスの產業政策のことや、共產主義のことや、婦人參政權に關することどもであつて、凡そ一時間半程談論を交へて、別れを告げて去つた。

羅馬に黑襯首相ムソリニーを訪ふ

瑞西のベルンより、直ちに伊太利に行つた。伊太利の政況を視察するためではあつたが、時の總理大臣、黑襯黨の總裁で、現下の歐洲で、評判男のムソリニーを訪ふのが主な目的であつた。

彼の生立は、極めて貧寒な鍛冶屋の倅で、社會黨の一新聞記者として世に出で、歐洲戰爭の時までは世に知られなかつた一靑年であつたが、開戰論を唱へて、社會黨から除名された。

近來、伊太利の政治が頽廢するに乘じて、伊太利共產黨は、頻に羽翼を張つて、全伊太利の支配權を得ようと努力した。そうしてあらゆる橫暴を働くのを見て、彼は慨然として起ち、靑年同志を糾合して救民倒赤尊王愛國の旗を樹てた。これが黑襯（ファシ）黨の初めである。彼は僅に三十になるやならぬの靑年に過ぎない。同志とても極めて僅少で、黑襯黨の生れた事さへも、報道した新聞は、伊太利中一つもなかつた位である。何人も其存在さへも認めなかつた。

けれども彼は、少數な靑年黑襯黨を率ゐて、ダビッドの如く勇敢に、過激派のゴライアスに向つて戰を挑

んだ。その健氣なる戰鬪振りは、忽ちに全國民の同情と後援とを受けるに至つた。彼の剛毅なる意志、絶倫の精力、周到なる組織力は、着々として到る處に凱歌を奏し、共産黨の勢力を驅逐した。その驚くべき迅速な成功は、何人をも驚嘆させずには置かなかつた。

英雄型の近代人

パオリが青年のナポレオンを見て、『あゝナポレオンよ、君はプルータークの英雄傳の中から出て來た人だ』と嘆美したと云ふが、近世同盟罷業の發明者として、著名な社會主義者の、ソレールは『ムソリニーは十五世紀時代の伊太利人だ、軟弱なる伊太利政治を救ふものは、唯だ彼れあるのみ』といつた。彼は近代人にない、英雄型の近代人である。救世愛國の信仰によつて焦げ上つた强い精神と、義勇奉公のためには、如何なる犧牲をも甘じて堪へる、スパルタ流の意志と、訓練をモットーとする黑襯黨は、疾風の枯葉を拂ふが如く、過激派を征服した。一九二一年共産黨が、死力を盡して計畫した全國大罷業同盟を、彼が四十八時間の中に粉碎したる手腕は、驚嘆すべきものであつた。共産黨の一根據地であつた、七萬の人口を有するアンコナ市が、僅かに三十二人の黑襯黨の青年決死團によつて征服され、占領されたと云ふ樣な、奇蹟的事實は黑襯黨の當時の猛烈なる進出を好く物語るものである。

ナポレオンの再生

青年ムソリニーは、忽ちにしてクロンウエルか、ナポレオンの再生の如く、伊太利に迎へられた。流石に全伊太利に暴威を振つた共産黨は、意氣地なくも此の英雄兒の前に慴伏し、驅逐され、掃蕩されて終つた。嚴重な軍律的の訓練と、信仰的感念よりして鍛へられた、青年黑襯黨は、僅かに二ヶ年の共産黨撲滅運動に於て、立派に軍隊化せられて終つた。勢ひに乘じて、ムソリニーは十一萬の黑襯黨を率ゐて、ローマに示威運動を試みた。儒弱なフッタ內閣は、風を望んで斃れた。政權は自から彼の手に落ち、彼は伊太利の主人となつた。貧寒の一青年として事を擧げ、僅かに三四年ならずして一躍して一國の大宰相となりたる榮達の速かなる彼の如き、古今共に其の類を見ない。

彼は、今は外務、內務、陸軍、海軍、空軍の五大臣を兼攝し、萬機を總裁し、夜を以て日に次ぎ、新伊太利の建設に從事してをる。彼の日常の生活は非常に緊張した生活振りである。平均一日一萬通の書狀を受取り、毎日引見するところの人は、殆んど無數で、一言も一分間も、無駄をせない。毎日の仕事の夥しきこと、その精力の絶倫なることは、何人も驚かざるを得ない處である。彼は伊太利建設の唯だ一人者であり、伊太利の靈魂それ自身である。

異例の會見

かような有樣で、私が伊太利のローマへ來た時に首相ムソリニー氏は、とても多忙で、遺憾ながら面會はむづかしいといふ、伊國外務省よりの通知であつた。首相が國政に忙殺されてをることは、その通りであろう、首相に面會することは容易の事ではない。

私はローマへ到着の翌日、ムソリニー氏の官房長を外務省に訪ひ、伊國來遊の目的を語り、種々意見を交換したところ、官房長は忽ち私に共鳴されて、首相ムソリニー氏に、その意を傳へてくれた。

首相が、其の翌日十一時四十五分に內務省にて私に面會するといふ通知があつた。從來外國人に接するには、外務省にてするのが一般の例であるのだが、特に私に內務省にて面會するといふことは、異例の沙汰で

あつたが、然し私は却て此の異例の會見は、意義あるものと思つた。

私は翌日の十一時四十五分の時間を期して、內務省に出掛けて見ると、應接室には他に七八十人の約束の客が詰め掛けてをる。その中には黑襯黨の幹部の人や、代議士や、地方知事や、新聞主筆らしき人が、樣々の用事を持つて、首相に面會を求めて居るらしく思はれた。此の朝、既にムソリニーは數百人の來客に接したとの事である。成る程うわさの通り首相の多忙は一通りでない。見るまに次から次へと客は呼び出されて首相に會つて歸る。面接の時間は短いのは二三分間位、長くも五六分間に過ぎない。私は約四十分間程待つた。最後に私へ通知が來た。それは、多くの時間を私に與へてくれる考へで、最後に廻したものと思つてゐたが、其通りであつた。

案內されて、扉を排して內務大臣の室に入つて見ると、室の中央の處に、壁を背にして、大きなデスクを前に、ムソリニーが坐つてゐた。少しく禿げた頭、廣き額、深き大きな眼、厚き頰、豐かな體格の持主、一目してこれが黑襯首相のムソリニーである事がわかる。

彼は私を見ると、椅子から立ち上つて、右手を高く差し出した。これは古いローマ時代の禮式で、黑襯黨の禮式として採用されたものである。私は委細構はず、ムソリニーの前へと進んで、デスクを挾んで握手をなし、挨拶を述べて椅子についた。英語で話しを始めたが、伊太利語の通譯を用ひてくれとの事であつたから、同伴の井上大使館通譯を煩はして話すことにした。

これからが私と同首相との談話であるが、談話は四十五分以上に亘つた。その間の會話を一々詳細ここに述べる暇を持たないが、話の題材は、如何に伊太利を改造するか、伊國並に歐洲に於ける共產黨の情勢、戰後に於けるバルガン諸邦の形勢等が、主なる話の題目であつた。ムソリニーの態度は、中々重々しく英雄張りの處があつて、どこかに古代ローマ人の風手を偲ばせる。私は遠慮なく色々の政治問題について問うた。それに對して彼れは、自由に意見を述べられたが、機微に觸れた點に至ると、臂を搖すぶつて、言を避けてをられた。別れに臨んで、彼は立つて戶口まで私を送つて來て、熱き握手を交へて、他日再び逢ふの機會あることを望むといひ、私の旅行の一路平安なるを祈ると、愛嬌ある最後の挨拶をされた。私もまた、彼の努力しつゝある新伊太利建造の、大事業の成功を祈り、且つ其の國家と國民の爲めに、切に健康に注意せられん事を望むといふ言葉を殘して、別れを告げた。

黑襯黨の獨裁政治

彼は年はまだ若い、春秋に富んでをる。彼と共に伊太利は興るであろう。然し彼は既に三度び暗殺者の手に見舞はれてをる。幸にして危害を免れてをるが、萬一不幸にして彼が中道にして斃れた時に、伊太利はどうなるであろうか。それは運命の神が唯だ獨り知つてをる。彼は云つてをる『吾れの前にムソリニーなく、吾れの後にムソリニーなし』と。彼れの相續者は、未だ伊太利にはないと思つてをるらしい。彼は生命の危險などは考へに置いてはゐない。

黑襯黨は、彼の神經であり、手足である。彼の精神、意志、精力、計畫、意圖を敏活に傳達し、勇敢に實行する機關は、その與黨たるファシである。これが現伊太利の政府とあらゆる政治機關を動かす力となつてをる。黑襯黨の獨裁政治は、これから生れてくる。

ファシズムの善惡は別として彼の政治の下に、最近數年間伊太利は驚くべき進步をしたのは事實である。

弛緩し、頽廢した伊太利の氣分は、引き締つてきた。政令は好く行き屆いてきた。

彼の政策は、正義を基調として、嚴肅なる政令によつて、風敎の頽廢を矯正しようとして、不正の行爲、不義の制度に對して、斷然たる處置を取つてをる。舊き諸制度を改廢し、人材を登用し、主として青年の精力と、努力によつて伊太利の復興を計ろうとしてをる。經濟力を立てなほし、國富の增進を計つて、伊國の信用を恢復するために、産業の奬勵に力を竭してをる。近時伊國の紡績業に、著るしく發達の事蹟を見ることができる。また近代産業の惱みである、資本と勞働の爭議を絶滅せんとして、彼は先づ資本家を說いて、勞働者に讓步せしめ、また勞働者を說服して、無謀の反抗を止めしめ、勞働と資本の間に介在して、兩者の調和を計つて成功してをる。彼は『最早、伊太利には同盟罷業はない。もう階級鬪爭はない』と云つてをる。

ムソリニーの外交

そこでムソリニーの外交政策は、どうであるかと見ると、彼は今は英國と握手し、南地中海に於て、佛國との對抗勢を維持し、盛にアフリカを開拓せんとしてをる。また一方にはアドリア海を勢力範圍に置いて、アルバニアを手に入れ、ギリシャと結び、ブルガリア、ホンガリー、ルーマニアを懷柔して、バルカン方面に進出しつゝある。從つてユーゴー・スラビアは、地理的に、政治的に、伊太利の壓迫を受け、救ひを佛國に求めてをる。ムソリニーの急進的、積極外交は、着々功を奏しつゝあるが、こゝに一つの新らしい歐洲の危機が潛んでをる。

萬國議會々議

私は伊太利から、佛國に還つたのであるが、當時佛國巴里にて、第二十四回の萬國議會同盟會議が開かれるのであつたから、その模樣をも、視察して見たいと思ひ、出席することにした。各國より議會を代表して議員や、政治家が、四百數十名集つたのであるから、頗るにぎやかな會合であつた。殊に巴里といふので各議員等の、夫人や小供までつれて來たものも少からずをつた樣だ。道がに巴里は世界の大都會だ、世界の遊客は幾十萬を數へる、またこんな國際的會合は斷えず開かれて居るものであるから、此會合も大して巴里人の視聽を惹かなかつた。會議は一週間繼續した。此會議に改善を加へたならば一層有力な働きをする國際會議になるだろうと思はれたが、今日の處ではまだ極めて幼稚なものである。

佛國の政情

私は佛國では、今は政界より隱遁して、專ら著述に潛心してをる、老雄クレマンソーを初めとして、大統領ドーメルグ、首相ポアンカレー、外相ブリアンなどに會見した。また思想家、文豪として當時名高いジード及びジローードーなどにも會見した。

佛國は、大戰爭に於て、最も大なる被害を受けた國で、その創痍は容易に癒えない。國民は戰爭の慘禍を深刻に味つてをる。人口は減少するし、國力は決して旺盛とはいへない。フランの暴落は、佛國産業の復興に、大なる障碍である。これが爲に佛國は一時、殆んど破産に瀕したのであつたが、ポアンカレー內閣ができて、此の危機を救はなければならぬといふので、元老總出で、時局救濟に當つてをる。

此の內閣には、總理大臣を十回勸めたといふ、ブリアン(外相)を初めとして總理大臣を勸めた政治家が六人まで入つてをる。辛うじてフランの暴落を喰留め、今日では稍や安定してをるが、少しく手をゆるめるとすぐフランが下落するといふ有樣である。佛國政治家の慘憺たる苦心、實に同情に堪へない。

元來佛國は小黨分立の國で、議會には十二以上も異つた政黨政派があつて、政黨の結束は、極めてルーズのもので、黨規もなく、黨則もなく、離合集散甚だしく、且に夕を測らざる有樣である。從つて佛國の政治は、變遷常ならずで、間斷なく政變が紛起してをつたのである。斯る有樣では、とても戰後の大危機を救ふことができないと、政黨も國民も考へて來て、兎も角も今日ポアンカレーの內閣を支持してをるのである。

佛蘭西人は、莫大な借金を負つて、非常に重稅に苦んでをることは云ふまでもないが、それでも今日猶ほ六十萬の兵を養つてをる。それは國防のためだと云つてをる。然らば何れの國に對して備へるのであるかと云へば、云ふ迄もなく獨逸である。戰勝國であるべき佛國が、戰敗國である獨逸を恐るゝこと虎の如く、四苦八苦の中に、猶ほ六十萬の兵を養つて日夜戰備を怠らず、枕を高うして眠る能はずといふ事は、如何にも氣の毒の感に堪へない。

かような情態から、佛國の外交政策は割り出されてをる。戰後新たに國を建てたポーランドと、白耳義を與國として獨逸に備へ、またバルガン諸州を連衡して、ブチー●アンタント(小協商)を作り、之を操縱して背後より獨逸を控制せるなどは、佛國外交近來の傑作といふべきであるが、如何にも獨逸を恐るゝの餘り、苦心慘憺の跡がみえる。

寧ろ此の外交的の苦悶より遁れんとして、外相ブリアンは、從來の傳統的佛國外交方針を一變して獨逸と親交提携の新外交政策を樹立せんとしてをる。之は佛國に取りて最も賢明の政策に相違ないが、佛國が果して此傳統的外交を一擲して、よく新政策を納るゝ丈の雅量があるかどうかはまだ疑問である。

英國の惱み

佛國よりドウバーの海峽を踰えて、英島帝國に來て見た。こゝにも亦大戰後の大なる惱みのあることを見た。けれども流石に英國は、歐洲の諸國に比し、人間は沈着で、富力も大きい、道德も高い、一國の基礎は安固で、社會の秩序も整然としてをることが一見してわかる。過去數百年の間、英國は聰明なる外交的先見と海上權の優越を以て、遠く領土を海外に獲得し、盛んに產業を興して貿易を擴大し、四海の富を蒐めて、世界の覇權を握つてをつた。今日と雖もにわかに英國に取つて代るべき國はどこにも見當らない樣である。猶ほ幾年か、世界は英國に、覇權を許すであろう。

英國が、其世界的帝國の權威を維持しようとするには、どうしても世界に跨る其廣大な領土植民地を保留して居らねばならない。然るに動もすれば是等の植民地領土は、熟したる果物が、木から落ちんとするが如く、政治的に、經濟的に、英島帝國より離脫せんとする傾向の見ゆるのは、英帝國の大なる惱みとする處である。昨年夏季も、皇太子は首相ボルドウイン氏と共にカナダに赴き、植民大臣は各植民地を巡視して、英帝國と植民地の連絡親善を計るに汲々としてをる。如何にして英本國と植民地の連鎖を鞏固にすべきかは、英國政治家の最も苦心する處であつて、其慘憺たる經營の跡を見ることが出來る。

大戰後英國の物價は著るしく騰貴した。海外貿易は不振を來し、不景氣に沈んでをる。戰爭によつて騰貴した勞働賃金は、容易に低下せない。英國の主要生產物たる鐵、石炭の如き、大陸の生產に比して二三割方高きは、外國貿易不振の重なる原因をなしてをる。今日の英國の產業は、主として植民地への販路によりて漸く氣息を繼いでをる。植民地が動もすれば、廉價なる大陸品を、直接買入れんとする傾きあるは、英國の甚だ心外に思ふ處であつて、勉めて植民地人の愛國心を皷舞激勵して、英本國に經濟的忠勤を勵ましめんと

努力してをる。之がため英本國は數億磅の宣傳費を遣つてをる。

英本國は工業國で、その人民の大部分は、工業勞働者である。隨て英國の農業は衰頽を極めてをる。英國の食糧品の三分の二は外國より輸入してをる。此の危機より救ふべく、英國の政治家は土地國有、自作農作成等の新政策を樹てゝ、農業衰頽を挽回しようと考へてをるが、英國は最早農業國に還る事はむづかしい。英國を殷富ならしめたものは、その盛大なる工業であつたが、やがてまたそれは農業衰頽の原因となつたのである。

工業勞働者は、貨銀の増加を要求してやまない。その要求は、自然物價の騰貴となり、外國との競爭に於て不利の立場に置かれ、やがてそれはまた英國工業の衰頽の原因ともなる。

資本に重稅を課し富の分配を要求する勞働黨の要求は、英國の資本を海外に流出せしめ、やがてまたそれは、資本的英國の衰頽の原因を作る事となる。

英帝國は經濟上に於てもディレンマの上に乘りかかつてをる。如何に此の瀬戸際を乘り越すべきかは最も注意に値ひする問題である。

戰後の英國の外交

外交の方面から英國を見ると、そこには英國政治家の傳統的聰明が窺はれる。由來英人は外交に於て常に歐洲大陸の政治家よりは、先見の明を持ち、優越した智識を具へてをる。戰後に於ても優越した立場を維持してをる。

米國の世界的に優越した勢力を認めて、できるだけ米國に讓歩して、米國と親交を厚うすることは、英國外交の第一義とするところである。歐洲大陸に對する外交は、歐洲列國の勢力の均衡を加減するを以て主眼としてをる。佛國と親交を結ぶは勿論なるが、一方には伊太利を援けて、地中海に於ける佛國の勢力に拮抗せしめ、獨逸を擁護して、戰敗の重壓より復活せしめ、ポーランドを援けて露國に當らしめ、アドリアチク沿岸の新興共和國を援助してソビエット露國の勢力の南下を防止するなど、七面六臂の英國外交は、いつも乍ら其聰明振りを發揮してをる。

英國の政黨

英國は政黨政治の本場である。歐洲諸國が政黨政治の變態を呈してをる時に、流石に英國は、着々政黨政治の機能を好く發揮してをる。正統的政黨政治の研究は、英國に於いて學ぶ處が甚だ多い。私は英國に來つて、保守黨の政治家としては、現内閣の首相ボルドウィン、チャンバレン諸氏、自由黨に於いてはロイド・ジョージ氏、勞働黨に於てはマクドナルド、ヘンダーソン、クレーン、トーマス諸氏、其他有力なる多くの政黨の人々と會談することを得た。又英國現代の文豪たるエチ・ジー・ウエールス、社會主義の學者、政治家として有名なシドニー・ウェブ等の諸氏とも親しく意見を交換するの機會を得た。

自由黨の衰頽

英國の政黨も戰後著るしき變化を經つゝあることを見た。嘗てグラドストンの如き英傑を出し、長く英國政界に覇を稱へた、傳統的大政黨であつた自由黨は、四十名足らずの少數黨となつて、憐れ議場の片隅に屏息してをる。ロイド・ジョージ氏ありと雖も、此の大勢を如何んともすることができない樣に見ゆる。アスキスとロイド・ジョージ二首領の不和より生じたる、政黨精神の分裂が、此の黨勢衰頽の直接の原因たるは

云ふまでもない。然し、自由黨員中には、此の現象を以て一時的のもので、やがて過去の隆盛の時代が再び來るであろうと云つてをるものもあるが、勞働黨の政治哲學者であるシドニー・ウエブは、私の問に對してこう云つてをる。——自由黨の政綱たる自由主義の政策の殆んど全部が、實現されて終つた今日の英國では自由黨は過去の政黨となつて終つた。その政策には、國民の心肝に觸れるような、何物も持つてをらない。にわかに自由黨が土地國有論を提唱してをるが、それは自由主義に取つて自殺の宣言であると云つて冷笑してをる。是は尤もな議論であると思はれる。

結局自由黨は、その左傾せる分子は勞働黨に走り、右傾せる分子は保守黨に投ずる運命に陷るものではないかと思はれる。今まで明敏にして機智に富むロイド・ジョージ氏は、ある機會を見て、勞働黨との聯合を策せんとしてをるのではないかと察せられる。

保守黨の勢力

保守黨が、前々回の總選擧に於て、壓倒的勝利を得て、四百有餘の大多數を制し得たのは、色々の原因があつて助けてをる。英國の勞働階級が、露國のボルシェビッキの勢力を感受しつゝあるに對し、英人特有の保守的傾向、並に排露的精神の强烈な反動であるは勿論、婦人參政權の擴張より、九百萬の婦人新有權者の投票は、多くは保守黨に投ぜられたるものと信ぜられる。婦人は性來冷靜にして、その精神的傾向は、寧ろ保守的であるといふ事は、保守黨の成功を助けた大なる原因であつたと思ふ。勞働黨の政治家等は、私の問に對して此の事實を漠然と否定してをつたが、獨逸國權黨の首領ヘッチ博士は、同一の私の質問に對して之を首肯したのみでなく、獨逸大統領選擧の時に、獨逸の婦人有權者は、ヒンデンブルク將軍に投票したものが多かつた事を證明せられた。

現在の保守黨中に於て、强て人物を求むれば、現首相ボルドウィンの外に、チャーチルか、チャンバレン位の處で、これとても一世の人心を維ぐ樣な人物とは思はれない。けれども來るべき次の總選擧に於て、事情に於て大なる變化なしとすれば、保守黨に取つて代るべき勢力ある政黨は差當り無い。矢張り政權は保守黨の手に歸するものと思はれる。シドニー・ウエブなども此の推測を否定しなかつた。

勞働黨の發達

勞働黨が、一九二四年に、まだ充分熟せない實力で、英國の政權を握り、短命內閣を造つた事は、勞働黨に取つて、果して好かつたか、惡かつたかは分らないが、兎も角も一時でも英國の政府を引き受けるだけの力を養成した事は、驚くべき長足の進歩と云はなければならない。勞働黨の發達は、極めて最近の事實で、僅に十數年來の事に過ぎない。此の短日月の間に、勞働黨が、嘗然たる大勢力を議會に占むるに至つたことは、英國政界の一大驚異である。世界戰爭の影響が、勞働黨の急速な發達を來した重な原因であるに相異ないが。これに就て私がヘンダーソン(前勞働黨の內務大臣で、現に同黨の幹事長)に尋ねた時に、氏は私の問に對し率直にこう答へた。英國の諸政黨が、空虛な議論のみに熱中して居つた時に、勞働黨は、主として社會、經濟問題に主力を注いだからであると。それはそうかも知れない。

だが其の外に、私が英國の政黨を研究して、勞働黨が短日月の間にかゝる驚異すべき大勢力を贏ち得たのは、偶然でないと思つた點は、勞働黨の組織制度が自由黨や、保守黨の組織に比べて、著しく進步してをるといふ事である。保守黨や、自由黨は、その歷史の古いと同じ樣に、政黨の組織も型が古い。消極的で、守

舊的で、惡く云へば時代に遲れてをり新時代に適しない。之れに反して勞働黨の組織は、積極的で、進歩的で新時代に適應してをる。從つて其の結果に於いて效果が得られるのである。吾々が學ぶべき點が甚だ多いことを痛感する。（詳細は他日歐洲政黨に關する論文中に述べる積りだから、玆に之れを略す）

ドルンの古城にカイザル皇帝を訪ふ

今回の歐洲歷遊中に於て、私に取つて最も興味多く、また感激に滿された事は、今古未曾有の大事變であつた、かの世界戰爭の中心人物で、今は和蘭のドルンの城に隱棲せられてをる、前獨逸皇帝カイザル陛下に面謁した事である。カイザル皇帝が五ヶ年間、全世界を敵として、孤軍奮鬪を續けてきた、あの絕倫の智勇と、不撓の精神とは、世界の人々の驚嘆して止まない處である。

されど武運劣なく、今はドルンの古城に、憂き歲月を忍ばさるる此の英雄皇帝が、今どんな生活をされてをるか、また何を考へてをられるかは、世界の多くの人が、最も深い興味をもつて知らんと欲する處である

私が此のドルンの城にカイザル皇帝を訪ふ心持ちは、昔歐洲全土を馬の蹄に蹂躙した甲斐もなくオートルトローの一戰、蓋世の雄圖、空しく夢の如く消えて跡なく、シントヘレナの孤島に配處の月を見る彼のナポレオンを音訪ふ心地がしたのである。

皇帝陛下は世を忍ぶ身、歐洲列國の監視嚴しく、今は絕對に人を避けて逢はれない、ある米國の新聞記者が六ヶ月餘りドルンの城の附近に泊り、カイザルの動靜に注意して、散策の機會を捕へて陛下に近き談話を交ゆることを得て、其の會見の記事を紐育の新聞に掲げて、其人は一躍大新聞記者の盛名を博したとの事である（是れは和蘭公使廣田君から聞た話である）カイザル皇帝に逢ふことは、絕對に難物らしい。そのカイザルに逢つて長い會談を試み、異常の優遇を受けた事は、私の今度の歐洲旅行の一大收獲と云へやう。

皇帝の返事

私が英京ロンドンに滯在中に、私の意見を書いた手紙を、獨逸皇帝に送つて、面謁を求めたのであるある朝食事の際に、ホテルのボーイが一通の書簡を私しの手に渡した。封を開いて見るとカイザル皇帝からの手紙である。私に面謁を許さるゝと云ふ親しみある優渥の手紙であつた。其の中にこれはインタービューではない、プライベート・オウデエンスであるよと特に付け加へて記いてあつた。此の手紙を見た時、私は何か一大勝利でも得たかの樣な感じがして、暫く心臟の高鳴るを禁じ得なかつた。當時私は英國でロイド・ジョージ氏やエチ・ジー・ウエールス氏とも、會見の約束の日がきめられてをつた爲めにすぐ出發する事が出來ず、二三日豫定よりも遲れた。是等の約束の會見を濟まして、すぐロンドンを立ち一夜を船の中に明して、翌朝和蘭の首府ヘーグに着いた。それは十月の三日であつた。公使館からの出迎を受けて、一先づホテルに落付いて、朝餐を濟して直ちにドルンへ電報を發し、私のヘーグへ來た事を報知し、並に皇帝の最も都合良き時に面謁の光榮を得たいと申送つた。そうして私は日本公使館に廣田公使を訪ふた。午後三時頃ホテルに歸ると、ホテルの支配人が蒼慌としてやつて來て、私の外出中ドルンのカイザル陛下より電話がかゝつて來て、私の歸り次第直に電話をドルンに懸ける樣にとの旨を傳へられた。私は直に電話を懸けて聞いた。すると侍從の人が電話へ出て、カイザル陛下は既に數日來、私のドルンに來るのを待つておられるから、直ちにドル

ンへ來る樣にとのことであつた。

ドルンへ向ふ

猶豫もできないから、直ちに衣服を整へて、自動車をドルンへと飛ばした。ホテルを出た時に、既に時計は四時を過ぎてをつた。ドルンの城は、ヘーグの町から近くない、七十哩の距離にある和蘭の古き貴族の城で、今は皇帝の居住として買求められてをる。

和蘭は、水澤の國である。堀割や溝渠（ヂヤヤホル）に水は漲つてをる。田舍道は良くペーブされてをるが、長い堤、短い土手、屈曲が多い。途中で日は全く暮れた。月の光は水澤の上を青白く照らし、窓よりさし込む月影は、吾が心に云ひ知れぬ感傷を與へた。自動車は、二十五哩の速力で此の間を走る。ドルンに着いた時は、夜の七時であつた。

薜蘿に蔽はれた懷しい古城

鬱蒼たる森の中に大なる建物がある。自動車は之に乘り付ける。鐵門が左右に開かれる、案内につれて階上の應接間に入つた。此處にて茶菓の接待あり、暫らく待つ程に二人の侍從らしき人物出て來り、カイザル陛下の住まはるゝ處は之れより約十分間の距離にある、之れよりそこへ案内されるとのことで再び階段を降りて後ろの庭に出て杉の巨木の並木の下を過ぎ行けば、遙か前面に薜蘿に蔽はれた繪に見る樣な床しい古城が見える、周圍に濠が構へられて、正面に鐵橋が架つてをる、これがカイザル陛下の日夕起臥せらるゝドルンの本丸である、石の階段を上れば三四の侍從が、慇懃に私を迎へて廣い廊下へと導く。遙か右にカイザル

）の宮殿がある。ふと見ると戸は開かれてをる、一隅にある大きな大理石の肖像の下に、カイザル陛下が立つて私を迎へられてをるのが好く見える。早足に進み行きて陛下に近けば、カイザルは右手を差し伸して握手を與へつゝ『君は戰後初めて余が受けたる賓客である』と申された。私は『皇帝陛下が特に私に與へられた此の大なる名譽に對し深甚の感謝を申し上ぐ』と御答をした。

廣き客殿は處せまき迄に樣々の裝飾家具が置かれてあつた。陛下は私を導かれて、宮殿の中央にある綠色の美しいサテンの敷布に蔽はれた、丸い卓子を狹んで二脚のアーム、チエーアに、陛下自から一つに坐られる私はそれに向つて坐つた。

カルザルの顏を見て

輝く電燈の光りに、僅かに二三尺を距て、初めて見上げたカイザル皇帝の面ざしつやのある血色の好い顏色、されど幾辛酸、頭髪は半ば霜を載てをる、昔と變らぬ權威あるあのカイザル髯、輝く眼には無限の親しみと魅力とが籠てをる。黑地に立島の銀線ある服を召され、黃金ダイヤモンドをちりばめたライオンのピン左胸に大元帥の略章を附けられた、カイザル皇帝の姿、その一瞥一笑は曾て是れ世界の安危に關したるものであつた、今私が卓を距てゝカイザルと相面したる其の一刹那、私の頭に電光の如く閃いたのが、あのシーザルの劇にある、シエキスピアの悲壯な一句であつた "But yesterday the word of Caeser might have stood agenst the world now lies he there"（つい昨日まで、シイザルの一言は、世界に對抗することもできたが、いま彼は彼處に横はる）此の通りの感じが、その瞬間に私の頭腦に閃めいたのであつた。

カイザル陛下は、日本について、種々なる問を發せられた。第一に閑院（プリンス・カンイン）の宮は今何をなされてをられるか、二回余を訪ねられたことがあつた。今は何の役に就かれてをられるかとの問であつた。私は閑院宮殿下は皇族中の元老、年若き天皇を輔佐ましてをられる事を申上げた。次に有栖川の宮について、次に明治天皇に對する讃美の言葉、次に先帝崩御の事、今帝卽位の大禮を明年に行ふは如何なる理由かとの御尋ねであつた。それについては三年の喪に服すと云ふ我國古來の慣例である事を申上ぐると、陛下は痛くその東洋の美風に感嘆の言葉を發せられた。更にカイザル陛下は、大地震について、京都の優美について、其他種々なる日本に關する問を發せられた。そは陛下が平生より盡きぬ興味を、日本に持たれ給ふ事を知つた。

若し日本が獨逸を助けたら

私は曾てかやうな空想否な想像を畫で見たことがある、それは歐洲大戰の際、若し我國が獨逸側に加擔してをつたならば其結果はどうであつたか、こう考へるときに無論日本は精鋭なる海陸軍を提げて、先づ第一に印度を獨立せしめたであらう。ビルマ、安南、其他東洋の被征服民族を開放して、自主獨立の國を作らしめるであらう。南洋諸島は盡く日本の手に落ち、濠洲の運命も亦知るべからずである。確かに日本は東半球の主人公となることが出來たのであらう。世界の形勢は全く一變し、人類の歷史は別の道行きを取つたかも知れぬ。當時皇帝は斯樣な、考を曾て持たなかつたであらうか。カイザルに問ふたらば、何と答へるであらうかと、斯樣に想像を畫いて見たことがあつた。

久しい以前に抱いた此空想が今實現された。端なく今カイザルをドルンの城に見ることゝなつた。そうしてまの當り此の英雄皇帝と膝を交へて、心行くまゝに談合する機會が私に開かれた時、私の心の奥に潛在して話さずには居られかなかつた。

然しながら陛下に問ふべき機會がない、カイザルは矢次ぎ早に種々の質問を問ひかけてくる、應接に暇なき程であつた。

なぜ君等は吾々と戰つたか

やがて質問のとぎれた機會に、私はこう云つた『陛下よ私をして思ふまゝに卒直に語ることを許し賜へ。陛下が私に與へられた此の優渥なる特權は、私の積年の願望を充した。私は勿論、日本國民は今日猶ほ陛下及び陛下の國民が成就されたる、洪大なる事業に對して、最高の尊敬を拂ひ感嘆に堪へない處であります』

とこう云ひ終るや否や、カイザル皇帝はさびのある力强い聲で

If so, why did you fight agenst us ?

（然らば何故君等は吾々と戰つたか？）こう云ふ問ひでありました。

私ははゝあカイザル陛下は私より之を聞きたかつたのであるな、と直覺した。私はかやうに陛下に申上げた。

陛下よ、歐洲大戰の起つた當時、恐らく吾が國民の半數は、獨逸に同情を持つてをつた。吾が海陸軍人の大部分は、獨逸の敗戰を云ふものは無つた位であつた。然しながら當時日本は一面に日英同盟の義務を感じ

て、これに拘束されてをつた傾きがあつた。然しながら若し陛下が此の際に、東洋の事は一切之を日本に任すからと云ふ提議があつたならば、恐らく日本は必らず敢然として獨逸側に參加したであらうと信ずる。果してそうなつたならば、戰爭の結果はどうなつたであらうか。今日世界の歴史は全く他の方向に流れてをつたに相違ない。何に故に陛下は此の提議を日本にせられなかつたか實に千載の恨事では御座りませぬか。と陛下に反問して靜かにカイザルの面を眺めた。此の時カイザル陛下は、千軍萬馬、大戰當時の慘苦を具さに思ひ起されて、痛恨骨に徹する思ひを顏に浮べて、しばし言葉もなかつた。そうして靜かに —All misunderStanding 凡てが誤解であつたと云へる如く、他を多く言はれなかつた。流石に陛下の深き沈想に落ち給ふ心を察して私は

陛下よ、たとへ戰爭の結果がどうあらうとも、陛下のなされたる洪大の事業は、シーザルの如く、ナポレオンの如く永久に、不朽に歴史のページに殘るであらう、由來英雄の事業は此の如きものであると申し上げた時

カイザル皇帝は莞爾として會心の微笑を漏された。更に又陛下は列國の形勢を論じ、雄辯滔々、ある時は激越卓を叩いて意氣軒昂、當時の獨逸大皇帝を思はしめた。皇帝が最も力說せられたるところは英、佛、獨露の外交の將來に於ける治亂興亡、共產露國の未來、支那國民の覺醒統一、特にカイザルは日本の皇室並に國民に對する敬慕の念を披露された。

カイザル皇帝と四時間に亘りて、興味多き感激に滿ちたる、幾多の問題について快談を試み、且つ陪食を賜り、異常なる優遇を受け、帝王の客となりて、思ひ出多き一夜をドルンの城に過したる事は、私の一生を通じて最も忘れ難き一日である。

和蘭を過ぎて

獨逸皇帝カイゼルを訪ふて、和蘭に來り、圖らずこゝに足を留むる事となつた。和蘭は私に取つては、思ひ出多き國である。先年私は、日本で日蘭協會と云ふものを起して維新當時の先輩である大隈伯を總裁として大に南洋發展を鼓吹した事があつた。和蘭は本國人口僅に八百萬最爾たる歐洲の一小國に過ぎないが、日本に取つては、最も舊き關係のある國で歐洲文明の最初の先生だ。當時の和蘭は、世界の海上權を一手に握り廣大なる殖民的領土を有し、富强天下及ぶものはなかつた。その首都たるアムステルダムは世界文明の中眞、通商貿易の樞區、今日のロンドン、紐育を凌ぐの有樣であつて。蘭人は、當時東洋貿易を獨占してをつたがこれから獲た富は、計り知るべからざるものがあつた。和蘭の富豪や、大旅館に行つて見て、裝飾、色彩の全く東洋風なのに驚かされる、それは長の間の東洋貿易から得た、國民の趣味だと思はれる。

ヘーグにある和蘭皇室の『森の離宮』を見たが、宮殿の中に、「日本の間」とゆふのがある、その中に古代漆器、象牙細工、錦の織物、其他樣々の古代日本の美術品が、飾られてをる。幾百年前、蘭人が長崎より歐洲に持ち歸つた、諸侯の貴重品であらう、實に驚くべき逸品ばかりである。

物變り、星移り、富み且つ繁つた和蘭も、後進の英國のために、海外の領土を多く掠奪され、今日は僅かに南洋の蘭領印度の富によりて息をしてをる有樣である。

今日和蘭の生命は、南洋印度にありとゆふも過言ではあるまい。此の殖民から生ずる一ヶ年の總利益は、約十二億萬圓位に見積られている。されば此の蘭領印度を保持してをることは、蘭人の國民的願望の最も大なるものである。

此の國は、ベルギーやデンマークと同じ樣に、歐洲の强大國の中に挾まれて、國は小さし人民は少なし、とても今の處政治的に發展する望がないから、せめて金でも儲けて、樂に贅澤に暮して行ふとゆふ譯で、國民の頭は金貫けとゆふ方に向いてをる。貨殖に沒頭してをる。されば蘭人は歐洲の支那人とゆはるゝ程あつて商賣にかけては鋭い拔け目はない。流石の英人も、蘭人には一目置いてをる。自然に國民は富裕に暮してをる。

和蘭は國は小さいが農業牧蓄が非常に發達してをる。殊に牧場の發達は驚くべきである。國の大部分が牧場ではないかと思はれる位である。牛の數が二百五十萬頭とゆふ莫大な數字を示してをる。農產畜產物の一年の輸出七億萬圓に達してをる。畜產が盛んであるから隨つて牛絡チースの製造は盛大のものだ。蘭人は好く朝晩チースを多量に食つて肥へ太つてをる。和蘭の女は丸顏でブク〳〵太つてをるのが多い、それはチースを澤山喰ふからだとゆふ。和蘭ではこれをチ・ースフエースとゆつてをる。

和蘭に來て著るしく目につくものは自轉車の多い事である。餘り歐洲で見ない現象であるが、和蘭は自轉の國とでも云ひ度ひ位である。老若男女を問はず紳士でも、勞働者でも、自轉車に乘るその數は三百萬あるとゆつてをる、町でも田舍でも道は自轉車で一パイになつてをる。自動車や馬車は餘り多く見うけない內閣大臣が、自轉車で官邸に乘り付ける國は、恐らく和蘭の外にはあるまい。かよふに自轉車が多いとゆふ理由は、恐らく國が古くて道路が狹く、且つ平垣であるため、自轉車が自然便利であるため發達したものと思はる。

和蘭に於ては最も著名な現象は、水澤の多い事である。何處へ行つても水がだぶ〳〵漲つてをる。それは國土が低いからだ、海よりも陸地が低いから海岸に大堤防を築いて水の進入を防いでである。一朝堤防が切れると、海水が這入てきて、國中が海になつて終ふとゆふ有樣だ。陸の水は海に流れないから、水が渚つて赤黑い溜り水が到る處に滿ちてをる。先祖傳來その中に住んでをる和蘭人は、餘り苦にしない樣に見へる。

和蘭の國の地勢はかよふなもので、治水とゆふ事が國家最大の重大事である。今は五億萬圓の資本を投じて和蘭政府が。港灣を干拓して陸地を作る計畫を進めてをる。此の大土工は今ま歐洲で大評判になつてをる和蘭には諺がある『神は海を作る、和蘭人は陸を造る』と眞に好く云つた諺である。

政治の方面からゆふも、和蘭は何等見るべきものはない。此の國の議會はあつても、政黨政治もなんでもない。下院の議員は百人、上院は五十人であるが、政黨の數は殆んど三十位ある、一人一黨とゆふが、和蘭の議會には一人黨が澤山ある、甚だしきは一人もない政黨が澤山ある。此の國の外交方針とゆへば、金を貰ける事と、蘭領印度の領地を失はない樣にする事が重なる大方針をなしてをる。

獨逸に入りて

獨逸は、大戰爭に於て五ヶ年間殆んど全世界を敵として戰ふた、たんだ一つの國である。革命が起つて獨

逸帝國は斃れ、政治の組織は全く一變し、經濟上の大變動は、驚くべき壞崩を與へ、加ふるに平和條約の結果、獨逸はあらゆる重き負擔と、苦痛を餘儀なくされて、寧ろ悲慘な運命の下に置かれてをる。獨逸國民はどふゆふ風に、此の難局に處してをるかを見るのが私の獨逸に入る目的であつた。

和蘭のヘーグから、伯林に來るには、十四時間を要する。獨逸の田舍の村落の事情も大概分かる。獨逸の國境に入りてより、農村の情態を見るに、土地は隅から隅まで、好く耕されてをる、寸壤尺地もゆるかせにされていない。馬耕牛耕も盛んに用ひられてをる。農耕地が少しも散亂してをらぬ、整然として恰も花園の如く手が入れられてをる。歐洲各國を經て、獨逸に來て、初めて農地に多くの人が出て耕作に從事してをるのを見た。勤勉な農夫は、一家を擧げて、鑪畺の間に汗を流してをる。一人もブラ〳〵遊んでをる人を見ない、小供までが田圃の間に手助けをしてをる。

道路や、橋梁が、完全に整頓してをるのを見る。どこの家屋も、農家も、立派に修理され、何等廢殘の影を見ない。新らしい農家なども盛んに建築せられてをるのを見た。森林は鬱々として見へる、牧場には青草が繁茂してをる。煙突は盛んに烟を出してをる。農村の中に見ゆる烟突も烟を揚げてをる。都會の工場の附近へ來れば、濛々たる黑煙が上つてをる。

そふして伯林に來て見ると、その秩序その整頓その繁榮は驚くばかり、活氣橫溢して、新興の氣分が到る處に漲つてをるのが見へる。獨逸人の顏が明かで、樂天的の處が輝いてをる。獨逸が世界を相手としてあの恐ろしい大戰爭をやつたよふの痕跡を少しも示してをらぬ。

獨逸の經濟界殊に工業は、戰後に於て非常なる困難に遭遇したが、國民の努力と、不屈の精神を以て、凡ての困難障害と戰ひつゝ、經濟界の復興のために力を盡してをる。獨逸人の驚くべき協同的精神、並に組織的統一の力を以て、戰後の經濟的不況、破產的苦境に對應して驚嘆すべき效果を奏してをる。

カルテル若くはツラスト(企業合同)によりて、各般の事業を大仕掛に統一し、或は協同組織によりて、生產及販路の協定を行ひ、經濟の合理化を實現しつゝある。之が爲に獨逸の工業經濟は、改善發達を遂げ、着々進步の成績を示してをる。

彼等は堅忍不拔の精神を以て、愀々として運命に從つてをる。凡ての難艱を甘受して、更により好き日の來る事を確信してをる。

私は獨逸に來て、現今獨逸第一の外交家、政治家として專ら歐洲に謠われてをるストレーズマンや國權黨の首領ヘッチ博士社會民主黨の首領で、現議會の議長たるレーベルや、中央黨の首領にて現內閣の宰相であるマルクスなどを訪れて獨逸の政治上、經濟上、外交上の種々な問題について議論を上下して見た。

帝政の斃れて共和政府が建設されて以來、獨逸の政治は、紛糾を極めてをる。議會は、十餘の政黨に分裂し常に三四の小黨の聯合によつて內閣が形成せられてをる。議會中に於て、最も勢力ある政黨一三一名を有する社會民主黨(マシアルデモクラト)であるが、現政府は、中央黨(ゼンフルーム)を中眞として右傾派政黨の聯合によつて內閣が造られてをる。

獨逸國權黨　(一〇三名)　獨逸人民黨　(五一名)
中央黨　(六九名)　民主黨　(三二名)

社會民主黨	（一三一名）	共產黨	（四五名）
國粹國權黨	（一四名）	バイエル人民黨	（一九名）
中產階級黨	（一七名）	無所屬	（四名）

今日獨逸の政治の大勢は、保守的に傾いてをる。國粹黨、國權黨が擡頭しつゝあると同時に一時獨逸の政界にショクを與へた共產黨の勢力は、時代の安定と共に次第に衰運に向つてをる。ヒンデンブルク大統領の八十年祝賀の盛大なデモンストレーションは現時の獨逸國民の心理的傾向を示すに充分である。明年の總選擧は獨逸に於て最も重要の時期である。

獨逸に於ける小黨分立の勢は、獨逸人固有の自由獨立を愛する思想に起源し、聯邦制度の歷史的事情により、加ふるに宗敎勢力の舊習等、復雜なる國民的生活に基くもので、獨逸の政治は、到底英國の如く二大政黨の制度を出現するに由なし。

聯合內閣は、小黨分裂より來る必然の勢であつて、隨つて幾多の政黨の妥協苟合によりて、政權を支持する結果、强固なる政策を實行すること不可能に終り、常に政局の不安を釀成すべしと云ふものあるも、聯合內閣の制は、互に政策の是非得失を明論善議して、自ら其間に妥協が成立する、要するに政治は妥協である。却つて公明の政治が行はれるとは、ストレーゼマン氏が私に話した一節である。

彼は現代獨逸の有せる最も卓越せる外交家政治家にして曾て首相たり、今マルクス內閣の外相である。思ふ處は之を言ひ、言ふ處は之を行ふ、卒直にして公明、從來の古型を脫した近代的の外交家である。彼は外交家として獨逸に無くてならぬ人物として、彼の政策は各派の政黨より認められ支持を受けてをる。

ストレーゼマンの獨逸の外交政策は、一言して云へば、親善主義、平和政策である。彼は獨逸の大戰爭によつて得たる瘡痍の甚だ重い事を知つてをる。如何にせば獨逸を復興すべきやと云へる問題は、凡ての問題の先決問題でなければならぬ。それは更に十五年の臥薪嘗膽を要する。その間獨逸の工業を復興し、通商を擴張して、大戰の疲弊を醫さなければならぬ。それには國際の親善、平和の政策の一本鎗で進めてをる。

されば獨逸は、忠實にウエルサイユの條約を決行し、またロカルの條約を英佛諸國の間に締結し、獨佛の國境の現狀を保障し、また國際聯盟に加入して、力を國際平和に盡してをる。

佛國に對しては努めて親善接近を計り、ブリアンの外交政策と相待つて、舊怨を忘れて好感情を釀成してをる。英國に對しても、獨逸は積年の對英惡感を抑へて、親善を企圖してをる。獨逸が土耳古に對して親善なる國際關係にあるは勿論であるが、バルカン諸國及び小協商に對しても、是等諸國にある多數獨逸民族の保護及び經濟的勢力の進張を計るため、親善和平の速進を考へてをる。

ソビエット露國に對して獨逸は、一方英佛と親善政策を採ると同時に、露國とも通商經濟條約及び中立條約を締結して、親善を企圖してをる。それは露國が强大なる軍備を有するも其一理由ではあるが、獨露の通商によりて、自國經濟の復興に利せんと之れが爲めには露國に對し巨大なる對露信用を貸してをる。かくて獨逸の外交は、平和と親善の政策の中に自國の富强を圖つてをる。

勞農の都に來りて

モスコーは、露西亞の舊都、スラブ民族の誇りとする聖京である。モスコー川の流れに沿ふて高く聳へるクレムリンの宮城の壁、燦然として輝く、大寺院の金の塔冠、今も昔しも變らぬ、重苦るしいロシアの色を漂はしてをる。

『モスコーの上にたゞクレムリンあるのみ、クレムリンの上にたゞ天あるのみ』とは、ロシア民族の古き傳統的の誇りであつた。此の古き都に來て、最初に思ひ出さるゝのは、大ナポレオンの雄圖、蓋世の覇業が、空しく雪と共に消へた、悲慘の劇的シーンである。

爾來百幾年、ロマノフ王朝、ザールの鷲旗は、たしかに世界の恐怖であつた。帝王の帝王とも云ふべき此のクレムリンの主人公が、風寒きシベリアの野、エカテンブルグの地下室で妻子眷族と共に、無慘の最後を遂げやうとは誰れか想像しやう。

此のモスコー、此のクレムリン、今は世界共産黨の大本山、世界革命の參謀本部として、恐怖と戰慄の對照物とあらうとは、猶更ら誰れか想像し得よう。唯だ運命の神のみが知りたもふのみ。

變り果てたモスコーの姿、豪奢を極めた帝政時代の面影は、更に見るよしもない。革命の廣場に面して、大歌劇場は巍然として立つてをる。パリの大オペラにも次ぐ壯大さである。今は勞働者の慰安場となつてをる。金色燦爛、眼を奪ふばかりの光景は、勞農露國の國徽の下に輝いてをる。曾てザールの座した帝王の座席には、今は勞農幹部の妻子等が、檎子をムシャ〳〵喰ひつゝ芝居を視てをる。良いコントラストだ。芝居よりも此の方が、餘程傑作の諷刺劇だと思つた。

レニンは流石が偉い處がある。藝術と教育には、非常に注意を拂つてをる。藝術には最高の敬意を表してをる。『藝術は人民のものなり』と高く掲げた劇場の宣傳標語は、無學なる勞働者に藝術の尊きを敎へたものである。モスコーの街は、如何にも勞働者の天下である樣な感じを示してをる。見るものは勞働者の群である。大建築物、王侯の住んだ高層な大邸宅は、勞働者のクラブとあり、集會所となつてをる。荒廢は市面を蔽ふてをる、道路の泥濘、家屋の破壞、革命の吹き荒んが跡を忍ばせる。資本主義國の、全盛を極めた西歐洲のロンドン、パリ、伯林の都を見た目で、革命の露都を見ると、天淵月鼈の差が認められる。

レニン宗

クレムリンの宮城に沿ふて大廣場に臨んで、レニンの墓が作られてをる。レニンが死せるそのまゝの姿がミーラとなつて玻璃の函の中に靜かに眠つてをる。幾百人の男女の勞働者が毎夕長蛇の列をなして參詣してをる。レニンのミーラを藏せるクレムリンの墓は、勞働者のメッカとして、高き尊崇が拂はれてをる。

共產黨の革命は、古き宗敎を破壞した。彼は『宗敎は、亞片の如し』と宣言した。多くの高僧は殺戮され夥多の寺院は壞された。その古き宗敎の破壞の上に、今は新らしい宗敎が建設されてゐた。それはレニン宗である。レニンは今は勞農露西亞の完全な偶像となつた。塑像に、繪畫に、レニンの像は、店頭に、街上にクラブに、劇場に、集會に、會館に、病院に、學校に、視線の觸るゝ處、掲げられてをる。レニンの一言一句は、金科玉條として遵奉され、その著書は、經典の如く讀まれてをる。

私は、モスコーへ來て、せめてレニンの生ける面影の半面を伺ひ度と思つて、レニンの未亡人（クルプス

カヤ夫人）を露國文部省の一角に訪ふて、長い間の會談を試みて、レニンの人となりを聞き、その未だ世に知られざる多くの逸事を聞くことを得た。

共産黨の專政政治

ソビエット露國の政治は、プロレタリアの獨裁政治だと云ふが、それは潛越だ。プロレタリアの獨裁政治ではなく、共産黨（コムユニスト）の獨裁政治である。露國は一國一黨主義で、共産黨以外の、黨派を認めない、異見を立つを許さない。英國のシドニー・ウエブが私に語つた。こゝに露國共産黨の專制政治（オートクラシー）がある。伊太利のファシズムが、ファシ以外の政黨の存在を認めないと同一の筆法である。ファシズムも、コムミユニズムも、共にデモクラシーの敵だ。

露國の純共産黨員は六十萬人と數へられてをる。その黨員は、教育され、訓練され、試驗された、立派な政黨員である。此の共産黨は驚くべき賢明の方法で組織された一大政黨である。此の六十萬の試練された黨員を以て組織された政黨が、一億五千萬の全露の民衆を共産黨網を張つて、水も漏さぬ樣に完全に支配し、統御し、押へ付けてをる。共産黨は、全露國を動かす唯一の動力である。一億五千萬の民衆は、共産黨の鞭影を望んで、默々として追隨してをる。此の六十萬の共産黨は、帝政時代の貴族や官僚の如く、今日の露國の指導階級であり支配階級であつて、歲月を經るに從つて、やがて是れがまた一種の貴族的、支配階級を形造ることになるであらう。

共産政策の變化

革命以來既に十年、レニン死して既に數年、共産黨の政策內容に著るしい變化を見るに至り、從つて黨內に內訌を生じ、その軋轢は、黨の分裂を惹起せんとする危機に逢着した。

共産政府の幹部派は、內政の右偏を必要とし、從來の勞働者本位より、農民本位に移り、農業の振興により、工業の發達を期せんとし、世界革命よりは先づ、國家資本主義に基き、富國强兵を强調し、威力ある露國を構成すべきであることを主張する。これは政府の幹部をなす、スターリン一派の主張である。

之に反對する者は、社會主義經濟を成功せしむるために、歐洲列國の、無產階級の勝利を達成せなければならぬ、都市勞働者と、農民との結合を否定し、兩者の鬪爭は避け難く、工業製品の値上げ、農民に對する最高課稅を要求するのである。此に反對するものはトロキー、ジエノエフ、カメネフの徒にして、此の兩派の鬪爭は、遂にスターリン派の勝利に歸し、トロキー、ジエノエフは全く共産黨から追ひ出されて終つた。けれども此の爭は、今後猶ほ繼ぐものであらうと思はれる。結局露國に於ける此の爭ひは、第一は國家主義と國際主義の鬪爭である。國政の局に當るスタリーン一派は、露國の復興を第一義とし、實際の危機を忘れてはならぬと云ひ、反對派は幹部派が、共産主義の根本義たる、世界革命を忘れて、內政の整理に沒頭せるを非難する、國家主義と國際主義との爭ひである。

二は、商工主義と重農主義との衝突である。幹部派は重農主義を取り露國大多數を占むる、農民を度外視するは不可なりとなし、勞農提携に依る產業の能率增進を主張す。之に對して反對派は、新經濟政策による大農の勃興、個人資本の發達は「プロレタリア」獨裁の眞髓を亡ぼすものとなし富農及個人資本に對し、重

稅を課し勞働者の待遇を向上せしむると主張す。これは重農主義と重工主義との爭ひである。

三は政府反對者は、政府幹部派が、官僚主義に落つるを罵り、黨を民主化し、黨内の分裂を認め、政府の方針に對し批判、黨議の自由を主張し、幹部派は之を以て黨の結束を破壞し、基礎を危殆に陷らしむるものとして之を拒否す、卽ち官僚主義と民主主義との爭ひである。

勞農露國の政治は周圍の情況に應じて幾變化した。レニン存生の當時から既に政策の上に現はれてをる。新經濟政策、新々經濟政策は、皆なその變化の過程を示してをる。

レニンの高弟で、彼の相續者を以て任してをるスターリンは、巧みに共產主義の色彩を巧みに周圍の大勢に順應して、保護色を加へて行く樣に見へる。これは今後の露國の政治が說明するであろふ。

共產政府の外交

共產露國の外交は、革命以來顯著なる成功を收めてをる。その外交の操縱者は、チチエリンである、その下にカラハンが働いている。

彼は共產露國の有する忠實なる尊敬すべき外交家である。彼は子もなく妻もなく、唯だ一匹の猫と一臺のピアノを友として隱遁せる聖僧の如く、十年一日、孤影蕭然、外務省の一室に、立て籠り、汲々として晝夜を分たず國務を掌理してをる。彼は今ま世界外交の舞臺に立てる花形役者である。手腕もまた凡庸ではない英國のある外交家が嘆息してこふ云つてをる。『露國と立ち合ふのは、恰かも鐵推を揮つて電波と戰ふ樣なものだ』と、そんな處に露國外交の機微が伺はれる。私はチチエリンと二時間に涉りて、列國の外交、極東の形勢について種々な談合を試みた。何と云つても、共產露國の外交の大敵は、英國である。英國と露國は調和すべからざる仇同士と見る。帝政時代も共產政府時代も變りはない。英露の確執は先天的とも見られる。

國交斷絕以來、英國は、經濟的に露國を壓迫してをるが、更に進んで露國をどふしよふもない。獨逸の外相ストレーズマンは、私にかよふな話しをした。『ゼネバで英外相チャンバレンに逢つて、英國は、露國に對してどふする考へであるか、これが(國交斷絕の事)最初の一歩かそれとも最後の一歩かと問ふたときに、チャンバレンはそれは最後の一歩だとゆはれた。英國も露國に對して、是れ以上に進んで、手の出しよふがないのだ。私がチチエリンと會談中に、此の話しをした處が、チチエリンは英國が今ま露國に對して經濟的、財政的に壓迫を加へ來て困る事情を話された。露國が今ま一番深い經濟關係を持つてをるのは、獨逸である。獨逸は、露國と西歐諸國の間にある唯一の仲介者となつてをる。獨逸が露國に貸與してをる信用は、三億マーク以上である。此の對露信用は、今ま迄で英國銀行家の援助によるものであるが、英國政府は、獨逸に對する信用を拒むことによつて、間接に露國に財政上の壓迫を加へてをる。これにはさすがの露國も、大苦悶の態で、何とかして切り拔け樣ふとつとめてをる。

露國の平和政策

何と云つても露國に取つて是も必要な問題は、外國との平和である。元と〳〵戰爭を利用して、天下を取つた共產黨、戰爭は大禁物である。今ま外國と戰爭が起れば、共產政府は危い、斃れるかもしれない。平和は露國に取つて重病人が、安靜を必要とするが如きものである。建國日猶ほ淺く、共產政府の基礎もまだ强

固でない、革命によつて破壞された、産業貿易も、まだ恢復されていない。共産政府の幹部は、好く這般の消息を知つてをる。少くとも十年位の國際的の平和を求めて、其間に內政を整理し、新制度の改善を計り産業の發達を圖らふと云ふのが、露國の本音であるらしい。

現在露國の中其外交は、こゝから出發してきてをる。外國からの侵略を防ぎ、國內の平和を維持するためには邊境諸國と保障條約(不侵略條約)を結ぶのが、何よりも急務である。勞農政府の外交家は、一生懸命になつて此の保障條約網を作ることに努力してをる。そうして着々成功してをる。一九二五年に最初に、巴里で保障條約を結び、翌年獨逸と結び、引繼ぎアフガンとも、リスアニアとも、ペルシヤとも同樣の條約を締結した。今の處では、露國の國境國で、條約を結んでいない國は、バルチク沿岸の小共和國と、日本及支那のみである。

斯樣な次第で、外相のチチエリンや、カラハンは勿論、其他私の會つた露國の要路者は皆な異口同音に、露國が日本とある種の條約を結ぶことの急務と、希望と、熱心を、表示せられた。チチエリンは、ザルーの愚劣なる政策が日本をして日英同盟に餘儀なくせしめたとまで、舊外交を罵倒して、日露の提携を高調せられた。私は日本が極東の問題、殊に滿蒙問題、支那問題を露國と協調して片付けるのは、今が一番最高の潮時であると考へる。

歐洲を大觀して

大戰後民族自決主義によつて、歐洲に生れた幾多の共和國、ポーランドを初め、バルチク沿岸に於けるヒンランド、エストニア、ラトウヒア、リトワニア、バルガン方面に於ける、チエク、スラバキア、ハンガリーの如き其他の諸邦に、ついても語るべきことはあるが、歐洲の大局を支配する力ではないから、暫くこゝに之を說かずのみならず是等の戰後新造の諸國は、猶ほ混亂の情態にあつて、國家としてはまだ未製品である。將來如何になり行くかは想像の限りではないが、唯だこう云ふ事だけは確かだと思ふ。民族自決主義によつて、歐洲に小獨立國が、雨後の筍子の如く生れ出た。これによつて歐洲大戰の後始末をした。やがてこれがまた歐洲に大風雲を呼び、大動亂を起す種となることは疑ひない事であらう。ドルンに隱棲せるカイザル皇帝が、將來更に大なる歐洲大戰爭が、起ることを豫言して、私に語られたのは、此の邊の消息を漏らすものである。

共産革命の鎭火

大戰直後、露國の共産革命のすさまじき火煙は、焰々として一時西歐のブルジョア國家を赤化せんとする觀があつた。間もなく伊太利にフワシズムが勃興して、その意思の大膽、組織を以て忽ちにして、共産的赤化運動を鎭壓平定した。その驚くべき迅速なる成功の歐洲諸國に與へた道德的影響は顯著なものであつた。

私は佛國に於て、共産主義の勢力の甚だ微弱なるに驚いた。佛人は共産主義を喜ばない民族であると云ふ事を多くの佛人から聞かされた。勿論今の、ボアンカレーにせよ、ブリアンにせよ、全然反對の政治家である、佛國では共産主義とか、過激思想とか云ふ事は餘り問題にされていない。英國でも、本年九月の勞働大會に於て、英國の勞働階級は、露國の共産派と全く手を切つて絕緣した事を天下に聲明した。勞働黨のシド

ニーウェブは私に語つた。『英國の議會には、サクラバール以外、一人も共產黨はいない、但し彼は英國人ではない』と。伊太利の、ムソリニーは、西歐洲に於て、赤化の危險を感ぜらるゝ處は、獨逸だと云つた。私は獨逸へ來て、多くの獨逸の政治家や、政黨の首領に逢つて、此の問題について問ふた。彼等は、共產主義か、獨逸を赤化し樣などとは、想像もしていないと云つてをる。ムソリニーの言の如きは、一笑に附して居た。

バルガン諸州にも、時々勞働者の計畫的動亂があつたが、一として物にならない、忽ちにして鎭定されて終つた。要するに西歐洲に於ては、共產主義、過激運動は失敗に終つた。そうして其の火の手はもはや下火となつてをる。いや殆んど鎭火の程度になつてをることは事實である。況んやまた、共產赤化主義の本家である、ソビエット露國が、消極的になつて、プロレタリアの世界革命よりは、先づ國家資本主義に退却して富國强兵を高唱する樣になつて來た。一世を驚かした共產主義と、資本主義の世界的鬪爭も、やがて國家社會主義の程度で、妥協する時代が來るであらふと考へる。

新らしきバランス、オブ、パワー

歐洲の國際關係は、まだ安定してない。列國の新國力平衡は容易に成立せない。猜疑と、不安と、恐怖の暗雲は、歐洲の空に低迷してをる。列國勢力の新權衡の樹立さるゝまでには、猶ほ幾多の迂餘曲折があるであらう。國際聯盟は、弱者の不平や苦痛を漏す、吹管口としては、有效の役目を果してをるが、列强の均勢を調節し、世界の平和の支持者となるまでには、多くの歲月を要するであらう。

歐洲に於ける、政黨政治の現狀を大觀するに、北に共產黨の專制政治がある。南に黑襯黨の專制政治がある。いづれも同工異曲のやり方でデモクラシーの軌道を脫した變態政治である。翻つて中央歐洲の諸國を見るに、その政黨政治は、盡く小黨分立の弊に墜落して、結束なく統一なく、離合集散、政變は旦に夕を圖らず、此處にもまたデモクラシーの弱點を、遺憾なく暴露してをる。唯だ英國に於ける政黨政治のみ、軌道を逸せず、變態に落ちず、好く時勢に順應しつつ、政黨の機能を發揮してをる。歐洲大陸の政黨政治は、危態に瀕してをる。變態せる專制政治に行くが、それとも弛緩せる民主政治に落ちるか。大なる時代の變化に對して、大陸諸國民の政治思想は、まだ充分に準備されていない。

歐洲列國を巡遊して、何れの國を見ても、政治的、外交的、經濟的、大戰爭が產んだ、死活の大問題に、直面してをらない國はない。舊邦には、舊邦の艱みがある、新造の國家には、新造の艱みがある。此等の大問題の解決によつて、將來の歐洲運命が決せられる。歐洲の天地には、今ま悽慘な空氣が漲つてゐる。國家的懊惱と煩悶の聲が、至る處に表現されてをる。それは生きんとする歐洲の叫びである。而して新らしき歐洲は、此の苦悶の裡から產れてくるであらう。

生きんとする歐洲を見て　（終）

316
331

歐遊書感

欲窮經國業、寰宇覓英雄
今古興亡事、獨觀靈襟中

‖君平‖

過烏拉山

去國三千里、飄迷烏拉嶺
日墜西歐昊、月色照東天

‖君平‖

昭和參年壹月貳拾五日印刷發行
（不許複製）　【定價參十錢】

著述者　東京、大森、神明山　松本君平

東京市麴町區內山下町一丁目一番地
東京政治學校內
發行兼編輯兼印刷者　佐藤俊三

東京市麴町區內山下町一丁目一番地
發行所　社團法人青年教團
電話銀座二二五、二二六、二二七番
振替東京三〇五五〇番

終